盲学校高等部生徒の職業意識に関する研究（2）

新谷 守

I. はじめに

I. 目的

III. 方法

IV. 結果

V. 考察

VI. 要約

≪参考文献≫

I. はじめに

わが国では、全般的に就職が厳しくなってきている。特に、障害者においてそれが言える。視覚障害者の場合は、伝統的に、なかなか保護的措置により、三療業に就労してきたが、特に、数年前から、暗眼者が、この業界に進出するようになり、その数において、視覚障害者を上まとっており、ますます厳しくなってきている。

先天性および中途失明の視覚障害者が盲学校で学んでいるが、特に、その高等部の生徒がいかなる意識を、この三療に対して持っているのか、それを知ることにより、現状の打開と改善への余裕が少しでも得られるのではないかと思ってこの調査を実施した。

この三療に、向いている特性や個性を持っている視覚障害者でもいれば、そうでない者もいると思われる。現状では、満足とはいえないが、ある程度の生活を維持して行ける職業は、この三療と判断して、それに就労の道を選択している人もいると聞いている。したがって、その中には、内からの意欲を持ってこの業界で働いている人が全くではないとも聞いている。三療以外の職業で就労できる職業は、条件的に見て、三療より悪いというのが、現実のようである。

青年期における自我同一性1)および、職業的同一性を考えた場合、その様相は、複雑で、社会的適応という意味においては、不満な要素を内包していると思われる。

人生における「生涯発達」とか、「人生移行」2)を考えたとき、単に視覚障害を持っているということのみで、社会的に見てあまりにも不利な条件に置かれていると思われる。例えば、職業選択の不自由もその一つである。

視覚障害者自らの努力で、それを改善することと並行して、障害者集団が、共にささえあい、
健常と言われている人々が、援助を行なうということが、その改善のテンポを速めることになると思われる。

本研究と類似の研究が、少数ではあるが、存在している。そのうちの一つは、盲学校高等部の普通科生徒のみに実施したもので、貴重な結果を明らかにしており、一つの意味を持っているといえる。しかし、調査項目が少なく、統計的な分析もなされていない。そこで、この調査では、保健理療科と専攻科も加えて、もっと総合的に把握しようとした。また、調査の項目数を増やし、その内容を、より細かくし、できるだけ統計的処理の可能なものにして実施した。

また、盲学校の教師などが持っている、高等部生徒の職業意識についての経験的もしくは、ごく簡単な調査による結果だけでは、不十分であると思い、全国的調査を行ない、数量的・統計的により細かくかつ詳密に整理・分析を行なったのが本研究である。

特に、本研究では、三療という技術を身につけることにより、将来どのように生活して行けると思っているのか、また、視力や性別から見て、職業意識について、いかなる特徴があるのかなどについての調査と分析を行なった。ここから得られた知見は、今後の盲学校における職業教育や進路指導の充実のために役立つものと思い、この調査を実施した。

II. 目 的

次の6項目にわたる目的を設定して研究を進める。

1. 全項目にわたる第1回調査と第2回調査の比較（差の比較の大きな細項目について行なう。3科別と3科の総合による。）。

2. 「三療という技術を身につけてさえいれば、将来にわたって自分の力で生活していけると思うか」という質問項目の内の細項目による分析（第1回調査と第2回調査の比較。3科の総合による。）。

3. 上述の目的2. の項目の細項目について、第1回調査と第2回調査の両方において一致したものに関する分析（3科の総合による。）。

4. 上述の目的2. の第2回調査の細項目に関する分析（3科別による。）。

5. 現在の視力についての項目の細項目と、他の項目の細項目との対によって示される特徴の分析（第2回調査の3科別による。）。

6. 性別についての項目の細項目と、他の項目の細項目との対によって示される特徴の分析（第2回調査の3科別による。）。

III. 方 法

1. 調査方法：全国の盲学校高等部[本科普通科（以下、普通科と略記する。）、本科保健理療科（以下、保理科とも略記する。）および専攻科理療科（以下、専攻科と略記する。）]の各生徒に対して、職業意識についてのアンケート調査を実施した。
2. 調査期間：第1回調査（以下、第1回とも略記する。）は、1982年6月から1982年9月まで、第2回調査（以下、第2回とも略記する。）は、1989年12月から1990年2月までである。

3. 集計対象校数とその割合：第1回は、46校（高等部設置校の76.7％）で、第2回は、58校（高等部設置校の96.7％）である。

4. 集計対象者数とその割合：第1回は、普通科が469名、保理科が458名、専攻科が1191名そしてこの3科の総合（以下、総合とも略記する。）が2498名である。第2回は、普通科が751名、保理科が682名、専攻科が1282名そして総合が2715名である。

全国の盲学校高等部（上述の3科）の在籍者数に対する集計対象者数の割合（％）は、第1回が66.7％、第2回が73.1％である。

5. 調査項目：既往歴、教育歴および職業意識などに関する項目（資料1参照）で、全項目数は、第1回が20項目で、第2回は21項目であり、この第1回の20項目とその内容は、第2回の21項目の中に含まれている。

6. 回答方法：墨字または点字の読み書きによる。

7. 集計と分析の方法：二次元のクロス集計表を作成し、カイ２乗（χ²）値を出し、度数の比率検定を実施した。各項目間の関連係数を出し、その項目（アイテムのカテゴリー）間の対において、全体として有意であることをもたらした、クロス集計表内の細胞（ます目）の度数が、有意に大きいか小さいかということを取上げながら、分析を行った。この集計と分析に使用した計算機は、東北大学大型計算機センターのACOS-3900 [日本電気株式会社 (NEC) 製] である。また、集計と分析のためのパッケージは、ACOSプログラムライブラリーの中のCROSSである。

（資料1） アンケート調査用紙（第2回調査）

生徒の皆さんへ

このアンケート調査は視覚障害者の職業に関する研究のためになされるものです。みなさんがあるいはみなさんの後輩が、いくらかでも職業的に平等になれるよう努力するつもりですから、どうか正直にお答え下さい。

質問はAからUまで全部で21問あります。質問をよく読んで、該当する番号にボールペンなどで濃くマル印をつけて下さい。なおアンケートに答える前に記入年月日を書いて下さい。

（平成 年 月 日 記入）

A 性別 1. 男 2. 女
B 年齢 （ 歳）
C あなたの学校名と所属する科と学年を記入して下さい。

（ 盲学校 科 学年）
D あなたの眼の疾患名を教えて下さい。

E 盲学校入学時の年齢を教えて下さい。
   1. 5歳以前       2. 6歳から8歳の間
   3. 9歳から11歳の間 4. 12歳から14歳の間
   5. 15歳から17歳の間 6. 18歳以降

F 視覚に障害を受けた時期を教えて下さい。
   1. 5歳以前（生まれつきも含む）
   2. 6歳から8歳の間 3. 9歳から11歳の間
   4. 12歳から14歳の間 5. 15歳から17歳の間
   6. 18歳以降

G 現在の視力を教えて下さい。眼振、視野狭窄、夜盲、色盲・色弱などの他の障害のある
   人はそれも記入してください。
   1. 全盲       2. 光覚程度から0.01の間
   3. 0.02から0.04の間 4. 0.05から0.09の間
   5. 0.1以上  （他の障害名 ）

H いつ頃から現在の視力になったのですか。
   1. 5歳以前（生まれつきも含む）
   2. 6歳から8歳の間 3. 9歳から11歳の間
   4. 12歳から14歳の間 5. 15歳から17歳の間
   6. 18歳以降

I あなたは現在寄宿舎やあるいは盲児施設（学園・寮など）に入っていますか。
   1. 入っている       2. 入っていない

J あなたは寄宿舎やあるいは盲児施設に何年間入っていますか（あるいは入ったことがありますか）。
   1. 10年以上       2. 6年から9年
   3. 3年から5年       4. 2年以内
   5. 入ったことは一度もない

K あなたは盲学校の友達以外に親しく話をすることができる友達がいますか。
   1. いる（ 人数 ）       2. いない

L 自分と同年代の普通学校の生徒と話す機会があったとした場合、あなたが相手に対して
感する気持ちは以下のどれだと思いますか（年配者は一般の患者者と話す場合を考えて下さい）。
1. 盲学校の生徒と同じように話せるような気がする
2. ひけめを感じてなんとなく気恥しいような気がする
3. ひけめはないか、どこか親しみないような気がする
4. いくぶん攻撃的な気持ちを感じる
5. その他（具体的に書いて下さい）

M 三療（指圧・マッサージ、はり、きゅう）をいつ頃から自分の職業として意識し始めましたか。
1. 小学部の頃  2. 中学部1年の頃
3. 中学部2年の頃  4. 中学部3年の頃
5. 高等部1年の頃  6. 高等部2年の頃
7. 高等部3年の頃  8. 社会に出た後
9. 意識したことはまだない

N 収入がある、ないということを考えずに、三療というものをすなおにみた場合、あなたが三療に対して感じた気持ちは以下のどれですか。
1. 自信の持てる職業である
2. 自信の持てない職業である
3. 別に何も感じない
4. その他（具体的に書いて下さい）

O 病院で働いたり、開業したりして三療に従事している人達の現状をどの程度正しく知っていますか。
1. よく知っている  2. 少ししか知らない
3. 全くわからない  4. その他（書いて下さい）
P 三療という技術を身につけさせていければ、将来にわたって自分の力で生活していけると思いますか。
1. 十分暮らしていける
2. 何とか暮らしていける
3. 暮らしていけないという不安がある
4. よくわからない

Q あなたは自分の職業に関し前向きに努力していると思いますか。
1. 努力している
2. かつて努力したことがある
3. 努力したことはない

R 三療以外で視覚障害者が自立している職業を知っているだけ挙げて下さい。

S 視覚に障害を受けてから、三療以外につきたいと思う職業はありませんか（あるいは、ありましたか）。ある（あるいは、あった）とすればそれは何ですか。そして何歳頃からその仕事のことを考えましたか。
1. 今ある（ ）（ ）（歳頃）
2. 今はないが以前にあった（ ）（ ）（歳頃）
3. 今はなくかつ以前もなかった

T Sの質問で 1. あるいは 2. すなわち“ある（あった）”と答えた人だけ答えて下さい。
あなたは三療以外の自分の希望する職業でも十分やっていけるという自信がありますか（あるいは、ありましたか）。
1. ある（あった）
2. 何らかの配慮があれば自信がある（あった）
3. ない（なかった）
4. よく考えたことがないからなんとも言えない

U 職業に関しあなたが豆頃思っていることや感じていることを何でも結構ですから教えて下さい。
IV. 結果とその考察

1. 目的1に関する結果とその考察

全項目にわたる第1回調査と、第2回調査の比較であるが、差の比較的大きな（割合（％）における差の増加率または減少率が30％以上）細項目について整理した（3科目別と3科目総合による）。

1）現在の年齢について

（1）30歳から60歳の間。①総合では、30歳から60歳の者の実数と割合（％）は、第1回の407名（16.3％）から第2回の621名（22.9％）になり、その割合において40.5％の増加である。これ以下の記述では略記する。

2）盲学校入学時の年齢について

（1）5歳以前。①普通科では、40名（6.0％）から99名（13.2％）になり、120.0％の増加である。②保科では、18名（2.8％）から57名（8.3％）になり、196.4％の増加である。③専攻科では、20名（1.7％）から81名（6.4％）になり、276.5％の増加である。④総合では、78名（3.1％）から238名（8.8％）になり、183.9％の増加である。

（2）9歳から11歳の間。①保科では、44名（6.9％）から31名（4.5％）になり、34.8％の減少である。②専攻科では、102名（8.6％）から51名（4.0％）になり、53.5％の減少である。③総合では、209名（8.4％）から149名（5.5％）になり、34.5％の減少である。

3）視覚に障害を受けた年齢について

（1）18歳以降。①保科では、139名（21.8％）から217名（31.5％）になり、44.5％の増加である。②専攻科では、244名（20.5％）から、346名（27.1％）になり、32.2％の増加である。③総合では、387名（15.5％）から567名（20.9％）になり、34.8％の増加である。

4）現在の視力について

（1）全盲。①保科では、69名（10.8％）から117名（17.0％）になり、57.4％の増加である。

（2）光覚程度から0.01の間。①普通科では、73名（10.9％）から112名（14.9％）になり、36.7％の増加である。

5）現在における、寄宿舎などへの在舎有無について

（1）入っていない。①保科では、205名（32.1％）から313名（45.4％）になり、41.4％の増加である。

6）寄宿舎などへの在舎年数について

（1）10年以上。①保科では、129名（20.2％）から92名（13.4％）になり、33.7％の減少である。

（2）入ったことは一度もない。①普通科では、130名（19.4％）から204名（27.1％）になり、39.7％の増加である。②保科では、145名（22.7％）から216名（31.4％）になり、38.3％の増加である。③専攻科では、301名（25.3％）から437名（34.5％）になり、34.5％の増加である。
四総合では、576名（23.1%）から859名（31.7%）になり、37.2%の増加である。
7） 三療を自分の職業として意識し始めた時期について
（1） 社会に出た後、①専攻科では、312名（26.2%）から446名（35.2%）になり、34.4%の増加である。
8） 三療に対する気持ちについて
（1） 自信の持てる職業である。①保理科では、129名（20.2%）から85名（12.3%）になり、39.1%の減少である。②専攻科では、232名（19.5%）から155名（12.2%）になり、37.4%の減少である。③総合では、489名（19.6%）から366名（13.3%）になり、31.1%の減少である。
9） 三療を身につけて場合の将来の生活状況について
（1） 十分暮らしていける。①普通科では、49名（7.0%）から70名（9.3%）になり、32.4%の増加である。②保理科では、68名（10.7%）から108名（15.7%）になり、66.7%の増加である。③専攻科では、123名（10.3%）から245名（19.3%）になり、87.4%の増加である。④総合では、238名（9.5%）から423名（15.6%）になり、64.2%の増加である。
（2） よくわからない。①保理科では、141名（22.1%）から97名（14.1%）になり、36.2%の減少である。
10） 自分の職業に関する前向きの努力について
（1） 努力したことはない。①保理科では、77名（12.1%）から58名（8.4%）になり、30.6%の減少である。
11） 視覚に障害を受けてからの、三療以外につきたいと思う職業の有無について
（1） 今はなくかつ以前もなかった。①専攻科では、315名（26.4%）から443名（35.0%）になり、32.6%の増加である。

2．目的2に関する結果とその考察
「三療という技術を身に付けてさえいれば、将来にわたって自分の力で生活していけると思うか」という質問項目の総数項目について、第1回調査と第2回調査の比較を行う。回答者数と割合（%）を示した後、その割合（%）における、増減を示し、分析を行なった（3科の総合による）。
1） 「十分暮らしていける。」という、細項目に関して。第1回が238名（9.53%）、第2回が419名（15.43%）で、割合（%）において、61.91%の増加である。
2） 「何か暮らしていける。」という、細項目に関して。第1回が1137名（45.5%）、第2回が1317名（48.5%）で、割合（%）において、6.57%の増加である。
3） 「暮らしていけないという不安がある。」という、細項目に関して。第1回が221名（20.86%）、第2回が424名（15.62%）で、割合（%）において、25.12%の減少である。
4）「よくわからない。」という、総項目に関して。第1回が558名 (22.34%)、第2回が494名 (18.20%) で、割合(%)において、18.53%の減少である。
5）「無答・不明」に関して。第1回が44名 (1.76%)、第2回が61名 (2.25%) で、割合(%)において、27.84%の増加である。

上述の、1）と2）を合わせると、第1回が1375名 (55.05%)、第2回が1736名 (63.94%) で、割合(%)において、16.15%の増加である。

また、統計的処置により、3科別と3科の総合のそれぞれにおける、この項目についての回答に対する第1回と第2回の間のx2値を求めた。その結果、それぞれにおいて、第1回と第2回の間に有意差 (5%水準) が認められた。このことは、第1回と第2回の間に差のあることを示していることになる。

次に、考察を行う。

「十分暮らしていける。」という総項目においては、第1回より第2回の方が増加傾向を示しており、「暮らしていけないという不安がある。」と「よくわからない。」というそののほうが、減少傾向を示しているように見える。これは、調査の年月日などの相違が要因として働いているとも考えられる。

3．目的3に関する結果とその考察

目的2の項目の総項目について、第1回調査と第2回調査の両方において一致したものに関する分析を行なった（3科の総合による。）（表1参照）。

1）「十分暮らしていける。」という、総項目に関して

(1) 女性が少ない (統計上の期待値に比べての多いか少ないかであって、実数を比べての多いか少ないかではない。以下、同様の意味である)。 (2) 現在の年齢が、30歳から60歳の者が多く、15歳から17歳の者が少ない (3) 普通科の者が少ない (4) 盲学校入学時の年齢が、18歳以降の者が多く、6歳から8歳の者が少ない (5) 盲学校の友達以外に、親しく話をすることができる友達がいない者が少ない (6) 同年代の普通学校の生徒と話す際に、ひけめを感じてなんかなく気恥じる気持ちになる者が少ない (7) 三療に対して感じる気持ちとして、自信を持てるという者が多く、自信が持てないという者と何も感じないという者が少ない (8) 三療に従事している人達の状態を、よく知っている者が多く、全くわからない者が少ない (9) 三療を意識したこととはまだないという者が少ない (10) 自分の職業に関し、前向きに努力していると答えた者が多く、努力したことはないと答えた者が少ない (11) 自分の希望する三療以外の職業でも、十分やっているという者が多い。

2）「何かから暮らししている。」という、総項目に関して

(1) 現在の年齢が、15歳から17歳の者が少ない (2) 普通科の者が少ない (3) 盲学校入学時の年齢が、5歳以前の者が多い (4) 盲学校の友達以外に、親しく話をすることができる友達
（表1） 各項目間におけるχ²値の一覧（第2調査の3科の総合による。）

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>項目</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
<th>9</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>回答方法</td>
<td>-</td>
<td>8.07161</td>
<td>90.5328</td>
<td>17.31731</td>
<td>7.05812</td>
<td>27.2098</td>
<td>480.528</td>
<td>21.9641</td>
<td>1.47320</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>性別</td>
<td>-</td>
<td>74.9546</td>
<td>33.6626</td>
<td>7.06344</td>
<td>45.1054</td>
<td>77.6427</td>
<td>109.620</td>
<td>19.9552</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>現在の年齢</td>
<td>-</td>
<td>1,509.80</td>
<td>299.240</td>
<td>2,527.24</td>
<td>1,673.54</td>
<td>1,467.61</td>
<td>118.233</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>科</td>
<td>-</td>
<td>3.27964</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>学年</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>科と学年</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>初学校入学時年齢</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>現在の視力</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>現在の視力になった時期</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>寄宿舎などへの入舎有無</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>寄宿舎などへの在舎年数</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>初学校以外の友達の有無</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>普通学校の生徒と話すときの波持</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>三業を意識し始めた時期</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>三業に対して感じる気持ち</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>三業の現状についての知識</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>三業による生活の自立</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>自分の職業に関する努力</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>三業以外に生きたいと思う職業の有無</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>三業以外の自分の希望する職業に対する自信</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>三業以外の自分の希望する職業に対する自信</td>
<td>-</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>12</td>
<td>13</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
<td>17</td>
<td>18</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>-----</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>視力</td>
<td>18</td>
<td>51</td>
<td>32</td>
<td>23</td>
<td>14</td>
<td>9</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>69.3127</td>
<td>0.623832</td>
<td>13.1395</td>
<td>1.03632</td>
<td>11.9839</td>
<td>41.1730</td>
<td>9.60490</td>
<td>18.6624</td>
<td>62.4546</td>
<td>18.4198</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>1,538.09</td>
<td>99.3293</td>
<td>409.163</td>
<td>187.586</td>
<td>72.2610</td>
<td>1,795.30</td>
<td>197.472</td>
<td>113.188</td>
<td>133.021</td>
<td>362.583</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>441.638</td>
<td>36.6165</td>
<td>40.1141</td>
<td>88.3421</td>
<td>45.8468</td>
<td>676.902</td>
<td>187.165</td>
<td>119.053</td>
<td>138.537</td>
<td>382.287</td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>497.147</td>
<td>60.5708</td>
<td>116.362</td>
<td>99.3328</td>
<td>90.0400</td>
<td>870.175</td>
<td>229.148</td>
<td>254.781</td>
<td>197.817</td>
<td>431.757</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>1,843.14</td>
<td>258.892</td>
<td>1,571.86</td>
<td>510.428</td>
<td>184.137</td>
<td>1,610.95</td>
<td>172.276</td>
<td>97.9924</td>
<td>107.234</td>
<td>270.145</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>2,805.16</td>
<td>124.027</td>
<td>471.702</td>
<td>167.331</td>
<td>67.2328</td>
<td>911.746</td>
<td>125.634</td>
<td>53.1146</td>
<td>74.7760</td>
<td>176.645</td>
</tr>
<tr>
<td>視力に</td>
<td>333.796</td>
<td>78.9067</td>
<td>223.440</td>
<td>70.1972</td>
<td>69.9598</td>
<td>134.861</td>
<td>64.0892</td>
<td>29.6463</td>
<td>64.0820</td>
<td>42.5076</td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>-</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>140.476</td>
<td>466.984</td>
<td>221.688</td>
<td>93.9926</td>
<td>1,159.28</td>
<td>130.556</td>
<td>68.984</td>
<td>107.610</td>
<td>210.701</td>
<td>222.528</td>
</tr>
<tr>
<td>視力に</td>
<td>1,528.03</td>
<td>115.433</td>
<td>91.4126</td>
<td>120.979</td>
<td>61.3268</td>
<td>105.579</td>
<td>40.9673</td>
<td>40.8699</td>
<td>8.98651</td>
<td>15.4274</td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>-</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>277.040</td>
<td>129.424</td>
<td>511.055</td>
<td>86.5500</td>
<td>117.884</td>
<td>41.1075</td>
<td>89.2936</td>
<td>95.8732</td>
<td>25.4937</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>視力に</td>
<td>315.856</td>
<td>232.721</td>
<td>116.137</td>
<td>120.474</td>
<td>107.262</td>
<td>112.575</td>
<td>70.2784</td>
<td>30.9624</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>-</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>611.389</td>
<td>574.109</td>
<td>338.863</td>
<td>442.954</td>
<td>433.456</td>
<td>101.117</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>視力に</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>968.320</td>
<td>1,071.74</td>
<td>526.385</td>
<td>228.824</td>
<td>77.1382</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>1,128.18</td>
<td>1,211.29</td>
<td>191.688</td>
<td>60.2015</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>現在の</td>
<td>517.914</td>
<td>202.808</td>
<td>56.2355</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>視力に</td>
<td>168.006</td>
<td>32.9246</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>なった</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
<tr>
<td>時期</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
<td>**</td>
</tr>
</tbody>
</table>

— 219 —
がいないという者が少ない。 (5) 三療に対して感じる気持ちとして、自信が持てるという者が多く、自信が持てないという者が少ない。 (6) 三療に従事している人達の現状を、少しが知らないという者が多く、全くわからないという者が少ない。 (7) 三療を意識し始めたのが、社会に出た後という者が多く、意識したことはまだいないという者が少ない。 (8) 自分の職業に関し、前向きに努力していると答えた者が多く、努力したことはないと答えた者が少ない。

3）「暮らしていけないという不安がある。」という、細項目に関して

(1) 点字による回答者が多い。（2）現在の視力が、全盲の者が多い。（3）三療に対して感じる気持ちとして、自信が持てるという者が多く、自信が持てないという者が少ない。（4）三療に従事している人達の現状を、全くわからないという者が少ない。（5）自分の職業に関し、前向きに努力したことはないと答えた者が多く、努力していると答えた者が少ない。

4）「よくわからない。」という、細項目に関して

(1) 女性が多く、男性が少ない。（2）現在の年齢が、15歳から17歳の者が多く、21歳から29歳と30歳から60歳の者が少ない。（3）普通科の者が多く、専攻科の者が少ない。（4）盲学校入学時の年齢が、6歳から8歳の者が多く、18歳以降の者が少ない。（5）視覚障害を受けた時期が、5歳以前の者が少ない。（6）現在の視力になったのが、5歳以前の者が多い。（7）盲学校の友達以外に、親しく話をすることができる友達がいないという者が多い。（8）三療に対して感じる気持ちとして、何も感じないという者が多く、自信が持てるという者が少ない。（9）三療に従事している人達の現状を、全くわからないという者が多く、よく知っているという者が少ない。（10）三療を意識し始めたのが、社会に出た後という者が少なく、意識したことはまだないという者が多い。（11）自分の職業に関し、前向きに努力したことはないと答えた者が多く、努力していると答えた者が少ない。（12）自分の希望する三療以外の職業で、十分やっていけるかどうかわからないという者が多い。

次に考察を行なう。

1）「十分暮らしていける。」と答えた者には、現在の年齢が、30歳から60歳と盲学校入学時の年齢が、18歳以降という、年齢の高い者が多く、就労に向けて努力していると答えた者が多い。

2）「何とか暮らしていける。」では、盲学校入学時の年齢が、5歳以前の者と三療に対して感じる気持ちとして、自信が持てると答えた者が多い。

3）「暮らしていけないという不安がある。」では、現在の視力が、全盲の者が多く、視力の程度が影響していると思われる。

4）「よくわからない。」では、普通科の者が多く、専攻科の者が少ないということなどから、これから三療などを習得しようという者が、多く含まれていると思われる。

三療で「何とか暮らしていける。」という判断をし、この意識を持っている人がいる。これは、不満足であるのが、あきらめているということを示しているようにも思われる。自分が、視覚障害者でなければ、やりたいと思うことは他に多数あるであろう。また、視覚障害者としても、もっと
と言いたいと考えていることがあると思われる。
弱視者には、三療でやっていけるという人が、全盲者より多いと思われる。全盲者には、それ
をやっていくには、困難をともなうと思っている人がみられる。もちろん、視力の要因のみ
でなく、知的能力、社会的適応能力そして人間・物的環境などが要因としてあげられると思われ
る。しかし、この調査では、それらを明確に示すことができなかった。

4. 目的4に関する結果とその考察
目的2の第2回調査の細項目に関する分析を行う（3科別による。）（表1参照）。
1）「十分暮らしていける。」という、細項目を回答した者に関して
   (1) 普通科と保理科では、女性が少ない（統計上の期待値に比べての多いか少ないかであっ
   て、実数を比べての多いか少ないかではない。以下、同様の意味である。）（2）保理科では、盲
   学校入学時の年齢が6歳から8歳の者が少ない。（3）専攻科では、現在、全盲であるという者が
   少ない。（4）専攻科では、盲学校の友達以外に、親しく話すことのできる友達がいないという
   者が少ない。（5）普通科では、三療を、小学部の頃から自分の職業として意識し始めたという者
   が多い。（6）三療とも、病院で働きつど職業したりして、三療に従事している人達の現状を、よ
   く知っているという者が多い。（7）三療とも、自分の職業に関し、前向きに努力しているという
   者が多い。（8）普通科では、三療以外の自分の希望する職業でも、何らかの配慮があれば、やっ
   ていける自信がある（あった）という者が少ない。また、専攻科では、その自信がある（あった）
   という者が多い。
2）「何とか暮らしていける。」という、細項目を回答した者に関して
   (1) 保理科では、女性が少ない。（2）専攻科では、現在、全盲であるという者が少ない。（3）
   保理科では、盲学校の友達以外に、親しく話をすることができる友達がいないという者が少
   ない。
3）「暮らしていけないという不安がある。」という、細項目を回答した者に関して
   (1) 普通科と専攻科では、現在、全盲であるという者が多い。（2）専攻科では、現在の視力
   が0.1以上の者が少ない。（3）保理科では、盲学校の友達以外に、親しく話をすることができる友
   達がいないという者が多い。（4）専攻科では、自分の職業に関し、前向きに努力しているという
   者が多い。
4）「よくわからない。」という、細項目に回答した者に関して
   (1) 3科とも、自分の職業に関し、前向きに努力したことがないという者が多い。
次に、考察を行なう。
1）普通科と保理科の女性と全盲者には、三療は、暮らしていくには厳しい職業と、受け取
られるようである。
2）3科とも、三療の現状を知っているという者と、自分の職業に関し前向きに努力してい
ると思っている者は、将来、三療で生活していけると思っているようである。

5. 目的5に関する結果とその考察23)
現在の視力についての項目の細項目と、他の項目の細項目との対によって示される特徴の分析（第2図調査の3料別による。）（表1・2参照）。
1）現在の視力が、0（全盲）の場合について
(1) 保理科と専攻科では、盲学校入学時の年齢が、5歳以前の者が多い（統計上の期待値に比べての多いか少ないかであって、実数を比べての多いか少ないかではない。以下、同様の意味である。）。 (2) 各3科では、盲学校入学時の年齢が、6歳から8歳の者が多い。 (3) 専攻科では、盲学校入学時の年齢が、18歳以降の者が少ない。 (4) 各3科では、現在の視力になったのが、5歳以前の者が多い。 (5) 保理科と専攻科では、現在、宿舎や盲児施設に入っている者が多い。 (6) 各3科では、寄宿舎や盲児施設に10年以上入っている者が多い。 (7) 普通科では、寄宿舎や盲児施設に6年から9年入っている者が多い。 (8) 保理科と専攻科では、寄宿舎や盲児施設にまだ入ったことが一度もない者が少ない。 (9) 各3科では、盲学校の友達以外に親しく話をすることができる友達のいるという者が少ない。 (10) 普通科では、三療を中学部1・2年の頃から自分の職業として意識し始めたという者が多い。 (11) 保理科では、三療を小学部の頃から自分の職業として意識し始めたという者が多い。 (12) 専攻科では、三療を中学部3年の頃から自分の職業として意識し始めたという者が多い。 (13) 専攻科では、三療を社会に出た後に自分の職業として意識し始めたという者が多い。 (14) 専攻科では、病院で働いたり、開業したりして、三療に従事している人たちの現状を、少しばかり知らないという者が少ない。
(15) 普通科と専攻科では、三療という技術を身につけていても、将来にわたって自分の能力で暮らしていけるといわゆる不安があるという者が多い。 (16) 保理科では、自分の職業に関し前向きに努力したことがないという者が多い。 (17) 専攻科では、視覚障害を受けてから、三療以外につきたいうよう職業があるという者が多い。 (18) 普通科では、三療以外の自分の希望する職業でも、十分やっていけるという自信があるという者が少ない。
2）現在の視力が、光覚程度から0.01の者がの場合について
(1) 専攻科では、盲学校入学時の年齢が、5歳以前の者が多い。(2) 普通科では盲学校入学時の年齢が、15歳から17歳の者が少ない。(3) 普通科では、寄宿舎や盲児施設に10年以上入っている者が多い。(4) 普通科では、盲学校の友達以外に親しく話をすることができる友達がいないという者が多い。
3）現在の視力が、0.02から0.04の者がの場合について
(1) 保理科では、盲学校入学時の年齢が、6歳から8歳の者が少ない。(2) 保理科では、現在、寄宿舎や盲児施設に入っている者は少ない。(3) 保理科と専攻科では、三療を社会に出た後に、自分の職業として意識し始めたという者が多い。(4) 専攻科では、収入がある、ないという。
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>普通科</th>
<th>保健理療科</th>
<th>専攻科</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 回答方法</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2 性別</td>
<td>女(-)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3 現在の年齢</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4 学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5 科と学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6 盲学校入学時年齢</td>
<td>6〜8歳 (+)</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>15〜17歳 (-)</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>15〜17歳 (+)</td>
<td>6〜8歳 (-)</td>
<td>15〜17歳 (-)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>15〜17歳 (+)</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
<td>15〜17歳 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>7 視覚障害を受けた時期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8 現在の視力になった時期</td>
<td>5歳以前 (+)</td>
<td>18歳以降 (-)</td>
<td>5歳以降 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>5歳以降 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>9 宿舎などへの入舎有無</td>
<td>入って いる (+)</td>
<td>入って いる (+)</td>
<td>入って いない (-)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>10年 以上 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>10 宿舎などへの在舎年数</td>
<td>入って いる (+)</td>
<td>入って いない (-)</td>
<td>入って いない (-)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>10年以下 (-)</td>
<td>10年以上 (+)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11 盲学校以外の友達の有無</td>
<td>いる (-)</td>
<td>いる (-)</td>
<td>いる (-)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>いない (+)</td>
<td>いない (+)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12 普通学校の生活と話すときの気持</td>
<td>いくぶん攻撃的である (+)</td>
<td>同じように話せる (+)</td>
<td>同じように話せる (+)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>中学部の項 (+)</td>
<td>中学部の項 (+)</td>
<td>社会に出た後 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>13 職校を意識し始めた時期</td>
<td>中学部 1〜2年 以上 (+)</td>
<td>小学部の項 (+)</td>
<td>中学部 3年の項 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>14 感じて感心する気持</td>
<td>中学部 3年の項 (+)</td>
<td>社会に出た後 (+)</td>
<td>社会に出た後 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>15 三歳の現状についての知識</td>
<td>少ししか知らない (-)</td>
<td>少ししか知らない (-)</td>
<td>少ししか知らない (-)</td>
</tr>
<tr>
<td>16 三歳に意見をされる気持</td>
<td>不安がある (+)</td>
<td>不安がある (+)</td>
<td>不安がある (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>17 三歳に意見をされる気持</td>
<td>努力したことがない (+)</td>
<td>不安がある (+)</td>
<td>不安がある (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>18 三歳以外に影響</td>
<td>ある (+)</td>
<td>ある (+)</td>
<td>ある (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>19 三歳以外の自己の有無</td>
<td>自信がある (-)</td>
<td>自信がある (+)</td>
<td>自信がある (+)</td>
</tr>
</tbody>
</table>
ことを考えずに、三療というものをすなおに見た場合、三療に対して自信の持てる職業であると感ずるという者が多い。

4）現在の視力が、0.05から0.09の者の場合について

（1）保理科と専攻科では、盲学校入学時の年齢が、15歳から17歳の者が多い。 （2）専攻科では、現在、寄宿舍や盲児施設にいない者が多い。 （3）保理科では、自分と同年代の普通学校の生徒と話す機会があったとした場合、相手に対してどんな攻撃的な気持ちを感じるという者が多い。 （4）保理科では、三療を中学部3年の頃から、自分の職業として意識し始めたという者が多い。

5）現在の視力が、0.1以上の者の場合について

（1）専攻科では、女性が少ない。 （2）保理科と専攻科では、盲学校入学時の年齢が、5歳以前の者が少ない。 （3）各3科では、盲学校入学時の年齢が、15歳から17歳の者が多い。 （4）保理科と専攻科では、18歳以降に現在の視力になった者が少ない。 （5）専攻科では、5歳以前の現在の視力になった者が多い。 （6）普通科では、盲学校の友達以外に、親しく話をすることできる友達がいるという者が多い。 （7）保理科と専攻科では、自分と同年代の普通学校の生徒と話す機会があったとした場合、相手に対して盲学校の人達と同じように話せるような気がするという者が多い。 （8）普通科と保理科では、三療以外の自分の希望する職業でも、十分やっていけるという自信があるという者が多い。
次に、この要約を行なう。

1）現在の視力が、0（全盲）の者の場合について

（1）3科とも、盲学校・寄宿舎生活が長い者が多い。 （2）3科とも、盲学校以外の友達がいるという者が少ない。 （3）3科とも、三療を小・中学部の頃から意識し始めたという者が多い。 （4）普通科と専攻科では、三療で暮らしていくのに不安心があるという者が多い。 （5）専攻科では、三療以外につきたいと思う職業があるという者が多い。 （6）普通科では、三療以外の自分の希望する職業でも、十分やっていけるという自信があるという者が少ない。

2）現在の視力が、0.1以上の者の場合について

（1）3科とも、盲学校入学時の年齢が、15歳から17歳の者が多い。 （2）普通科と保理科では、三療以外の自分の希望する職業でも、十分やっていける自信があるという者が多い。

6. 目的6に関する結果とその考察

性別についての項目の細項目と、他の项目的細項目との対によって示される特徴の分析（第2回調査の3科別の）（表1・3参照）。

1）女性の場合、現在の年齢については、専攻科では、18歳から20歳の者が多く、また、保理科と専攻科では、30歳以上の者がない（統計上の期待値に比べての多いか少ないかであって、実数を比べての多いか少ないかではない。以下、同様の意味である。）。
（表3） クロス集計、x^2値および度数の比率検定の結果からの分析表
（第2回調査の3科別による。）（＋印は多い、－印は少ないを表す。）

<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>科目</th>
<th>普通科</th>
<th>保健理療科</th>
<th>専攻科</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>男</td>
<td>女</td>
<td>男</td>
<td>女</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>回答方法</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>現在の年齢</td>
<td>30歳以上（－）</td>
<td>18~20歳 (+)</td>
<td>30歳以上(-)</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>科と学年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>盲学校入学時の年齢</td>
<td>9~11歳 (+)</td>
<td>18歳以降 (－)</td>
<td>18歳以上 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>視覚に障害を受けた時期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>現在の視力</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>現在の視力になった時期</td>
<td>18歳以降 (+)</td>
<td>18歳以降(－)</td>
<td>18歳以降 (+)</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>寄宿舎などへの入舎有無</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>寄宿舎などへの在舎年数</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>盲学校以外の友達の有無</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>普通学校の生徒と話すときの気持</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>三療を意識した時期</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>三療に対して感じる気持ち</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>三療の現状についての知識</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>三療による生活の自立</td>
<td>よくわかる（－）</td>
<td>不安がある (－)</td>
<td>十分暮らしていける (－)</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>自分の職業に関する努力</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>三療以外につきたいと思う職業の有無</td>
<td>ない(なかった) (－)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>三療以外の自分の希望する職業に対する自信</td>
<td>配慮があれば自信がある(あった)(＋)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
2) 男性の場合、官学校入学時の年齢については、専攻科では、18歳以降の者が多い。女性の場合、普通科では、9歳から11歳の者が多く、保理科では、18歳以降の者が少なく、専攻科では、6歳から8歳の者が多く、18歳以降の者が少ない。

3) 男性の場合、現在の視力になったのは、保理科と専攻科では、18歳以降の者が多い。女性の場合、保理科では、18歳以降の者が少なく、専攻科では、5歳以前と12歳から14歳の者が多く、18歳以降の者が少ない。

4) 女性の場合、収入がある、ないということを考えずに、三療というものをすなわち見たとき、三療に対して、自信を持ってる業観であると感じる者は、保理科では、少ない。

5) 男性の場合、三療という技術を身につけさせておけば、将来わたって自分力で生活していけるかどうか、よくわからないという者が、普通科では、少ない。女性の場合、自分の力で暮らしていけないという不安があるという者が、普通科と専攻科で少なく、よくわからないという者が、普通科で多く、将来わたって十分暮らしていけるという者が、保理科と専攻科で少なく、何とか暮らしていけるという者が、専攻科で多い。

6) 女性の場合、視覚障害を受けてから、三療以外につきたいと思う職業は、今はなくかつ以前もなかったという者が、保理科と専攻科で少なく、今はないが以前にあったという者は、専攻科で多い。

7) 女性の場合、三療以外の自分の希望する職業でも十分やっていける自信が、何らかの配慮があれば、ある（あった）という者が、専攻科で多い。

次に、この要約を行なう。

女性には、官学校入学時の年齢が男性より低い者が多いという傾向がある。また、女性には、視覚障害を受けてからでも三療以外の職業につきたいかったという者が、男性に比して多いという傾向がみられる。そして、女性には、三療以外の職業でも、何らかの配慮があれば十分やっていける自信がある（あった）という者が、保理科で多く、また、十分やっていける自信がない（なかった）という者が、専攻科で多い。

V. 考 察

18歳以上の視覚障害者は、全国に30万7千人、身体障害者全体（241万3千人）の12.7％を占めている。また、視覚障害者30万7千人のうち重度（身体障害者手帳1・2級）は17万3千人で、56.4％を占め、身体障害者全体の重度者の割合（38.3％）より高い。そして、視覚障害者30万7千人のうち6万8千人で、就業率は22.2％で、身体障害者全体の就業率29.0％に比較して低い。また、就業している視覚障害者のうち、三療に従事している者は39.6％（身体障害者平均4.4％）と高く、技能工は8.5％（同24.3％）や事務職は4.0％（同10.7％）とその割合は低くなっている（厚生省「身体障害者実態調査」昭和62年2月）より。)

また、わが国では、官公庁や企業などが、法律で定められている障害者の法定雇用率を、完全
にクリプライしていないのが現状である。

近年、わが国では、心身の健康に留意しようとする傾向が見られる。そのために、この三療は、質的に高くて豊かな生活を送るために役立つ要因をそなえていると思われる。つまり、その要因として、リラックスができること、ストレスの解消をもたらすことがあげられる。また、多忙な社会生活から離れ、人間性的一面を養い、回復させるために有用であると思われる。

筆者の知る限りでは、世界的に見て、日本のように、公的な学校などでこの三療を学ばせ、資格を取らせるという国は少ないといってよい。また、三療業を行うために、一定の免許を必要とするという国も少ないのではないか。この施療を求める日本人は、マッサージ・指圧、鍼、灸が好きな国民であるともいえ、それだから需要があるのだと思う。

ところで、三療は、全盲者や弱視者の職業として、その特性に比較的合ったものであるとも言われている。まず、観業には、資金金をあまり必要としないし、体力と技術を保持していればやいている職業であると言われている。また、ある意味では、視覚障害者が勝ち取る、かつ保護されてきた職業である。現在では、視覚障害者の職業としての文化財であり、共通の財産であり、伝統ある職業であると言える。そしてまた、この業界には、歴史的基盤があり、そこに入っても安心である。つまり、助け合い、ささえ合い、学びあえるという有利な条件を持っていると思われる。

視覚障害者雇用促進条例（1983年、1987年）の調査では、高等部普通科の生徒で理療科に進みたいという者は、昭和57年調査では、453名（48.3％）、昭和61年のそれでは、449名（50％）となっている。これらから、約50％といってよい。

また、三療を選ぶ理由として、「むいているから」と答えた人が23％、「生活の安定のため」が44％と半数近くを占めている。これは、三療以外の仕事で生活を支えていくことは、大変だということを、反映しているものと考えられる。

本調査でも、三療で十分もしくはどうにかやっていけるという人は、50％から60％（3科の総合による）であり、三療で生活の安定を得ようとしていることがわかる。

三療の業界に対する公的援助がある。つまり、社会福祉の援助がある。生活扶助、年金がある。税金、交通費、通信費などに対する配慮がある。また、割引き、無償の制度などがある。それらの支えにより、細々とではあるが生きていくので、不満足ではあるが、いたしかたなく、それによって生きようとしている人が、また、とうざるを得ないと思っている人がいるということが推察される。

障害者は、能力に応じて、自分でせいっぱい働くことと思う。不足部分は、社会からの援助を受ける、また、受けるべき権利をもっているのでそれを行使する。障害をうたうものは、個性または、個人差の一つと考えれば、それで良いと思われる。例えば、「あはき法」の改正（平成2年）があった。その中には、視覚障害者を保護している条項が、ひき続き残っている。つまり、障害者の過度な、この業界への進出を阻止ための条項である。しかし、視覚障害者の中には、こ
の保護が、真の職業的自立のために、マイナスの要因として作用すると考えている人もいる。また、この「あはき法」の改正により、免許取得のための条件が変わり、視覚障害者も暗眼者と対等に競争をすることになった。現在、各盲学校では、学力・技能の向上に努力している。しかし、それと並行して、視覚障害者の特性を考慮していて、免許レベルに差を設けるという、例えば、AとBのランクを設定すべきであるという意見も出されている。

次に、世界の視覚障害者の職業と就労の現状について述べる。

この三療という職業がいっそのは、少ない国では、暗眼者とほぼ同様の職業についている。しかし、その就労の実態は、どのようなものかについての詳しい情報は、あまりわが国に入っていないと言える。おそらく、わが国と同様に、視覚障害者の就労実態は、厳しいものと思われる。

しかし、その職域は、わが国のそれより広いと言えそうである。わが国も、近年、関係者の努力により、遅々と推進しているが、三療以外の職業への就労が促進されつつあることは、忘れてはならない。特に、エレクトロニクス技術などを利用した各種の支援機器の開発により、プログラマー、電気技士、一般事務等の分野にも、その就労の場が広がっている。

これまで見てきたように、三療のよりいっそうの拡充と、三療以外の職業（職種）開拓のどちらも要求されており、視覚障害者が、興味と能力に応じた多様な職業選択ができるようにすることが強調されている。

本論文は、アンケート調査による数量的・統計的分析であるが、より具体的に、事例をあげて、より深く、職業的自立の実際と意識について研究すべき課題が与えられていると言える。つまり、このような実態を明らかにすること、特に、個々の事例について、掘り下げることが必要であり、今後の課題であると思う。これに関するいくつかの論文は散見するが、その数はまだ少ない。

ところで、ヘルスキー（企業内管理師）は、三療の技能を生かしながら、サラリーマンになれるし、また、一般企業への就職も可能になっているので、このような新しい職業の開拓が必要である。しかし、これに加えて、従来からの三療による、病院内、治療院内、また個人の介業による職業的自立の拡充は、ますます必要になってきている。

視覚障害者の職業開拓を推進させる際に、本研究で示されているような、視力、性別、それに加えて年齢（現在の年齢や視覚に障害を受けた年齢など）などの要因を考慮することも、意義のあることであると思う。

本論文で得られる結果は、極めて常識的なものであるとも言えるが、経験的知見を、新しく、数量的・統計的に把握し、現状の一部を整理して、提示できたものと思う。

今後の視覚障害者の職域の拡大と職業の充実のために、社会に働きかける際の、裏付けとなる基礎的資料の一部を、本研究により、提供できたと考えている。

また、本研究により、視覚障害者は、諸々の条件の基で多様な職業的自立をめざそうとして、学んでいることがわかる。そして、その成果を、良い形で示せるように、社会での職業的
受け皿をもっと用意し、また、教育の場でも多様な職業選択が可能なようなカリキュラム等を、積極的に用意すれば、視覚障害者の中には、それを喜び感謝する人が、かなり存在しているということが、この調査は、示唆しているように思われる。

最後に、三療に関する調査を中心にした本研究と、すでに発表した三療以外の職業に関する調査を中心にした研究（1994年22）の結果を総合して考察を行ってみると次のようなになると思う。

個々の視覚障害者の能力と特性と希望に合った、三療および三療以外の職業の、両方にわたる職域拡大を、わが国の盲学校高等部生徒は望んでいるという、職業意識を持っていることを、数値的・統計的処理による二度にわたる調査結果の分析から、ある程度示したと思う。

このことを実現するために、視覚障害者を中心にした健全者との共同により、一歩一歩前進するほかに道はないと思う。具体的には、一つには、現在よりも、もっと多くの者が大学で学ぶことができるようにすること、二つには、就労支援制度とその運用の充実を計ること、三つには、就労後の援助制度とその運用の充実を計ることがあげられる。

VI. 要 約

全国の盲学校高等部生徒に対して、職業意識についてのアンケート調査を実施した。第1回は1982年6月から9月までの間に、2498名に対して、第2回は、1989年12月から1990年2月までの間に、2715名に対して実施した。その結果は次のようにある。

1）「三療を身につけた場合の将来の生活状態」について、「十分暮らしていける」と回答した者が、第2回が第1回より、その割合において、増加傾向を示している。また、現在の年齢が、30歳から60歳と、盲学校入学時の年齢が、18歳以降という、年齢の高い者が多く、就労に向けて努力していると回答したものが多い。

2）普通科と保健理療科の女性と全盲者には、三療は、暮らしていくためには厳しい職業と、受け取られているようである。

3）普通科と保健理療科における、現在の体格が、0.1以上の者には、三療以外の自分の希望する職業でも、一分やっていける自信があるという者が多い。

4）女性には、視覚に障害を受けてからでも、三療以外の職業につきたかったという者が多いという傾向がみられる。

<謝 辞>

この研究には、全国の盲学校とその高等部生徒の皆様および木村成助氏にご援助を賜った。記して感謝の意を表す。
＜参考文献＞

1）伊藤精英（1988）：視覚障害青年の自我同一性地位、和光大学人文学部紀要、第23号、127-140。

2）神山敦子（1991）：視覚障害者の就労に関する諸問題とその解決策に関する一考察一職業選択と就労後の実態調査を中心に一、平成2年度、東北大学教育学部教育心理学科心身障害学専攻、卒業論文。

3）石谷剛彦（1991）：学校・職業・選択の社会学一高卒者就職の日本のメカニズム一、東京大学出版会。

4）視覚障害者雇用促進連絡会（1983）：盲学校高等部普通科生徒の職業意識調査、雇用連情報、No.2、視覚障害者雇用促進連絡会。

5）視覚障害者雇用促進連絡会（1987）：盲学校高等部普通科生徒の職業意識調査、雇用連情報、No.14、視覚障害者雇用促進連絡会。

6）視覚障害者職域開発研究会（1992）：視覚障害者職域開発研究会報告書（総括編）、平成3年度研究調査報告書、No.1、日本障害者雇用促進協会。

7）新谷守、三田将子（1983a）：視覚障害者の職業に関する研究1一盲学校高等部生徒の職業意識について（その1）一、日本教育心理学会第25回総会発表論文集、802-803。

8）新谷守、三田将子（1983b）：視覚障害者の職業に関する研究2一盲学校高等部生徒の職業意識について（その2）一、日本特殊教育学会第21回大会発表論文集、2-3。

9）新谷守（1984a）：視覚障害者の職業に関する研究3一視覚障害者の就労対策について（その1）一、日本教育心理学会第26回総会発表論文集、922-923。

10）新谷守（1984b）：盲学校高等部生徒の職業意識、第10回感覚代行シンポジウム発表論文集、119-126。

11）新谷守（1985a）：視覚障害者の職業意識と職域拡大の方策、東北大学教育学部研究年報、第33集、121-165。

12）新谷守（1985b）：視覚障害者の職業に関する研究4一盲学校高等部生徒の職業意識について（その3）一、日本教育心理学会第32回総会発表論文集、518。

13）新谷守（1989）：視覚障害者の職業意識。新谷守：視覚障害児（者）における潜在能力の開発と代償機能の形成に関する教育心理学的研究、第12章、405-464、東北大学教育学部視覚障害学研究室）。

14）新谷守（1990）：視覚障害者の職業に関する研究5一盲学校高等部生徒の職業意識について（その4）一、東北心理学研究、第40号、48-49。

15）新谷守（1992a）：視覚障害者の職業に関する研究6一盲学校高等部生徒の職業意識について（その5）一、日本特殊教育学会第30回大会発表論文集、28-29。
16) 新谷 守 (1992b) : 視覚障害者の職業に関する研究(7)－盲学校高等部生徒の職業意識について（その 6）－. 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 462.
17) 新谷 守 (1992c) : 盲学校高等部生徒の職業意識(2). 第18回感覚代行シンポジウム発表論文集, 77-83.
19) 新谷 守 (1993b) : 視覚障害者の職業に関する研究(9)－盲学校高等部生徒の職業意識について（その 8）－. 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 562.
20) 新谷 守 (1993c) : 視覚障害者の職業に関する研究(10)－盲学校高等部生徒の職業意識について（その 9）－. 東北心理学研究, 第43号, 41.
21) 新谷 守 (1993d) : 盲学校高等部生徒の職業意識(3). 第1回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集, 83-86.
24) 新谷 守 (1994c) : 視覚障害者の職業に関する研究 (12)－盲学校高等部生徒の職業意識について（その11）－. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 556.
26) 橋本宗明 (1981) : 視覚障害者の雇用と就業について. (障害者の人権と生活保障. ジュリスト増刊. 総合特集, 24, 296-300, 有斐閣.)
27) 塩利和, 宮昭夫 (1979) : 障害者と職業選択－視覚障害者の場合－. 三一書房.
A Study of Vocational Consciousness of High School Students in the Schools for the Blind (2)

Mamorus SHINTANI

We twice made a survey of the vocational consciousness of high school students in schools for the blind in Japan by means of a questionnaire. The first questionnaire was answered by 2,498 students from June 1982 to September 1982, and the second questionnaire by 2,715 students from December 1989 to February 1990. A summary of the results obtained is as follows:

1) As regards "your future life after you acquire skill in the 'three treatments' (massage, acupuncture and moxa treatment)," more students answered on the second questionnaire that "we will be able to earn a sufficient livelihood" than on the first.

2) Many of the students who answered that "we will be able to earn a sufficient livelihood," having entered schools for the blind after the age of 18, were then between 30 and 60 years old. They were well-advanced in age and answered that they didn't make any attempts to gain employment.

3) Female students who study in the general course and in the department of massage for health and completely blind students seemed to regard the "three treatments" as a hard way to make a living.

4) Many of the students with more than 0.1 eyesight in the general course and in the department of massage for health had confidence in getting along well with work of their own choice other than the "three treatments."

5) Female students tended to show a desire to work in fields other than the "three treatments" even after they became visually-handicapped.